

被災地に届けよう！わたしたちの心を！！

～気仙沼中学校との交流を通して～

美祢市立別府小学校PTA

1 学校地域の概要

PTA会長 : 秋山 史之
 学校長 : 亀谷 秀雄
 児童数 : 36名
 会員数 : 33名 (家庭数25 教職員8)
 所在地 : 〒754-0603

山口県美祢市秋芳町別府1918
 TEL 0837-64-0047
 FAX 0837-65-2447
 E-mail beppu-e@c-able.ne.jp



本校は、日本最大級のカルスト台地「秋吉台」や日本屈指の大鍾乳洞「秋吉洞」で有名な美祢市秋芳町の西部に位置している。

また、1985年（昭和60年）に日本名水百選にも選定され、カルスト特有の水質で、透き通ったブルーの水が不思議なほどの美しさを見せる「別府弁天池」が校区内にある。この摂氏14度の冷水を利用した町営の「にじ鱒養殖場」は、年間10万尾のにじ鱒を出荷し、地産地消を推進している市内の学校給食にも供出されている。

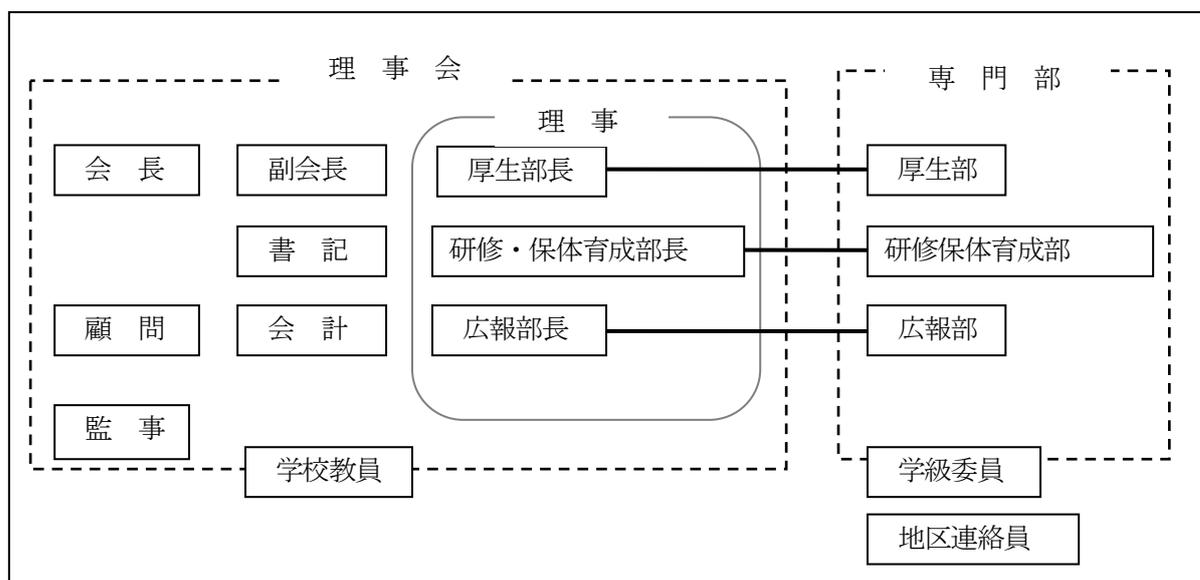
カルスト台地という恵まれた土壌と気象条件が育んだ「秋芳梨」の生産も盛んで、この「秋芳梨」は地域の特産品である。本校では、平成元年から梨生産農家の永嶺克博様（現秋芳梨生産協同組合長）の梨園の木をお借りし、花粉とりから花粉付け、摘果・大小の袋かけ・敷き藁・収穫・販売・土作りといった作業を実際に体験する中で梨栽培の知識を深めながら「秋芳梨」生産農家の苦労や喜びを実感する「梨下村塾」を開設している。この塾は平成元年から27年間も続いており、本校ならではの地域と連携した特色ある活動で、児童は、この「梨下村塾」で勤労の尊さや生産の喜びを体験しながら、ふるさと別府を愛する心を育てている。

また、毎年秋に壬生神社に奉納する「別府岩戸神楽舞」は、昭和61年に「山口県無形民俗文化財」に指定されており、現在では、少子化により継承する若者がいなくなったことから断絶を避けるために、本校児童が総合的な学習の時間などを利用して、地域の方から直接指導を受け、伝統を引き継いでいる。



このように、豊かな自然に恵まれた本地域の保護者や地域の人々は人情味豊かで、学校教育に対しても大変協力的であり、まさに、別府小学校は地域に支えられた学校といえる。

2 PTAの組織図



【各部会等の活動内容】

厚生部

- ・PTA美化作業の運営
- ・リサイクル品回収の運営
- ・盆踊り大会バザーの実施



(リサイクル品回収)

研修・保体育成部

- ・PTA講演会の運営
- ・救急法講習会・PTA球技大会の運営
- ・学校保健安全委員会の運営
- ・交通当番表の作成
- ・プール当番表の作成



(救急救命法)

広報部

- ・学校広報誌「さくらの丘」の発行
(年2回発行)

学級委員

- ・学級PTA活動の実施
- ・学級懇談会の運営



(給食試食会)

地区委員

- ・リサイクル品回収の協力
- ・各地区への文書配布

3 研究テーマについて

被災地に届けよう！わたしたちの心を！！

～気仙沼中学校との交流を通して～

平成23年3月11日、東北地方を中心に未曾有の被害を出した東日本大震災。日本中いや世界中から支援の動きが起きたことは記憶に新しい。

本校でもこの震災直後、6年生が道徳の授業で、東日本大震災で被災した気仙沼中学校の当時2年生の作文を読んだ。すると今自分達にできることはないかと考えるようになった。その結果、「別府小学校全員に呼び掛けて募金しよう」という動きになった。卒業まで後わずか一週間という時期であった。

この6年生の意思は、翌年の6年生にも受け継がれた。募金活動は新しい6年生を中心に行われた。そうした活動を通して、被災地の復興を祈る機運が高まっていった。そしてそれまでに集まった募金と24年度の卒業記念品料を義援金として、下記のように、直接気仙沼中学校へ持参して届けることになった。

- 日時 平成24年8月7日、8日
- 参加者 平成23年度卒業生5名（当時中学校1年生）
6年生 2名
引率教員 2名（校長、担任）

気仙沼中学校では、生徒会を中心に山口からの来訪者を歓迎してくれ、悲惨な体験をしながらも笑顔で接してくれる気仙沼中学校の生徒の姿に別府の子どもたちは心を打たれた。そこで、気仙沼中学校のために「今、自分達にできることはないか」と考え、「被災地に届けよう秋芳梨とわたしたちの心を」というプロジェクトをスタートさせた。それは、自分たちが「梨下村塾」で育てた地域の特産である秋芳梨を、気仙沼中学校にみなさんに食べてもらい、元気にそして笑顔になってもらおうというものだった。結局、秋に収穫した梨にメッセージを添えて、気仙沼中学校へ送った。



その後も毎年、「被災地に届けよう！わたしたちの心を！！」というキャッチフレーズを掲げ、自分達が育て、収穫した梨を送り続けている。

ある時、梨を送ったお礼の電話の中で、気仙沼中学校の校長先生が「被災地を思い続けてくれることが、心の支えになっています。」とおっしゃった。この言葉の意味は大変重かった。気仙沼中学校の生徒は、家を流されたり、身近な人を亡くしたりしている子がたくさんいる。しかしふるさと「気仙沼」復興に向け、前向きに生きようとしている。この故郷を大切にしようとしている気持ちは、別府小の教育目標「ふるさとを愛し、心豊かにたくましく生きる別府の子の育成」と通じるものがある。

そこで、その後も「被災地へ届けよう！わたしたちの心を！！」のキャッチフレーズを掲げ、学校だけではなく、PTAや地域にも広げて、気仙沼中学校との交流活動を継続していく

こととした。具体的には、このキャッチフレーズを、昇降口から入ったところに大きく掲げ、その周囲に交流活動の写真や新聞に取り上げられた記事を掲示していった。PTAは年2回行っているリサイクル品回収の地域へ配布するプリントに、このキャッチフレーズをのせ、呼びかけをした。また、PTAはリサイクル品回収や夏祭りで行うバザーの収益の一部を気仙沼中学校へ送ることとした。さらに、本校が行っている気仙沼中学校との交流活動の経緯や取組を学校便りにのせ、地域にも知らせた。



4 活動内容

(1) 秋芳梨の栽培活動「梨下村塾」を通して

「1 学校地域の概要」でも述べたが、本校では地域の特産である秋芳梨の栽培活動を、「梨下村塾」として、梨生産農家の方のご協力のもとで行っている。今年度で27年目になり、梨下村塾経験者から5名の梨づくりの後継者が出ている。また本校の卒業生で、今は別府を離れて暮らしている方から、「お店で秋芳梨を見ると故郷を思い出し、懐かしくなる。」という声も聞くようになってきた。報道でもよく取り上げられるので、保護者や地域の方にとっても愛着のある活動になっている。

気仙沼中学校との交流を始めた時、当時の子どもたちが、この「梨下村塾」の活動を通して育て、収穫した秋芳梨を送ろうと考えたのも、もっともなことだといえる。

梨の栽培活動である「梨下村塾」の年間の取組は以下のとおりである。

- 4月・・・花粉採り、花粉付け（受粉作業）
- 5月・・・摘果（一つ残す実を決めて残りの実は取る）、小袋かけ
- 6月・・・大袋かけ
- 7月・・・敷き藁作業（木の周りに藁を敷き、水分の蒸発を防ぐ）
- 9月・・・収穫・販売
- 12月・・・土作り（次の年のために土に栄養を与える）

この中で、「被災地へ届け！わたしたちの心を！！」をキャッチフレーズとした、気仙沼中学校との全学的な交流の取組を紹介する。

まず、「花粉付け」を行う時に、枝の一本を「気仙沼中学校」へ送るためのものとした。それ以外の枝は、5つの生活班（1年～6年の異年齢集団）に分け、自分たちの枝として世話している。しかしこの「気仙沼中学校」の枝はみんなで世話することになっている。

「大袋かけ」の時には、子どもたちは、事前に学校でその袋に「おいしくなってね」とか「大きくなってね」といった梨に対する思いを書いていた。「気仙沼中学校」の枝の梨にかける袋にはみんなで、「この梨を食べて元気になってね」とか「いつまでも気仙沼のことは忘れません」といった気仙沼中学校に対するメッセージを書いていった。

今年も9月に、1本の梨の木から750個もの大きくて、みずみずしい梨が「収穫」できた。さっそく学校に持って帰り、仕分けをし、気仙沼中学校へ送る梨、お世話になっている方、



地域の独居老人に配る梨、販売する梨、自分たちが持って帰る梨に分けていった。気仙沼中学校へは、段ボール1箱、72個の梨を子どもたちのメッセージを添えて送った。



そして「販売」。販売を始めたのは昨年度からである。目的としては2つあった。1つは子どもたちが育てた梨を地域で販売することを通して、秋芳梨のことをもっと多くの人に知ってもらおうということである。当日は多くのお客さんや報道陣も集まった。もう一つが、売上金を気仙沼中学校へ送ることを通して、継続して復興支援をしていくことの必要性を多くの人に知ってもらおうということであった。多くの保護者も売り上げに協力していた。また、こ

の点もしっかり新聞やテレビで取り上げてもらった。今年度は200個の梨を約30分で完売することができた。そしてその売上金は全て気仙沼中学校へ送った。

こうした交流を気仙沼中学校と続けているが、昨年末のクリスマス間近に、素敵な贈り物が別府小学校へ届いた。それは、今までの交流のお礼としてお礼のメッセージや市内(気仙沼市)の弁論大会で読んだ作文である。その作文を読んで、職員一同感動した。すぐに掲示し、保護者や地域の方にも見てもらえるようにした。また学校便りにも載せた。前述した「被災地を忘れないこと、思い続けることが被災地の方々の心の支えになる」という気仙沼中学校の校長先生の言葉を改めて実感することができた。

余談になるが、この時気仙沼の特産であるふかひれスープも送っていただいた。この交流には保護者や地域の方にも協力いただいているので、学校でどんど焼きを行った際、来ていただいた保護者や地域の方に振る舞った。もちろん気仙沼中学校から送ってきたものであるというPRをして…。

<気仙沼中学校の生徒が市内の弁論大会で読んだ作文>

もう大丈夫

気仙沼中学校 3年

私の中で何かが薄れてしまっていた。大切な何かを私は忘れてしまっていた。いえ忘れていたことさえも気づかずにいた。そのことに気づかせてくれたのは、ある一つの梨です。

先日、気仙沼中学校にあるものが届きました。それは数十個の梨。山口県の別府小学校の子どもたちからの贈り物です。東日本大震災で被災した私たちのために育ててくれたのだそうです。たくさんの手書きのメッセージも添えられていました。その中の一つ、小学校2年生の男の子からの言葉が私の目にとまりました。

「ぼくはまだ気仙沼の人を忘れてはいません。」

私ははっとしました。自分よりもずっと幼い男の子が私たちのことを忘れずにいてくれる。遠く離れ、会ったこともない人たちが震災を忘れず、梨を育ててくれた。その果物を「気持ち」として届けてくれたのです。

そして私は自分が「忘れてる」ということに気づいたのです。私は震災で家を流されました。今は祖父の家に住んでいます。祖父の家は高台にあり、私の部屋からは津波で流された町並みの跡を見ることができます。でも以前は見るのもいやだったこの風景に、今は何も感じなくなっている自分がいました。被災したこの状況に慣れてしまっている。あの震災の時に感じたことが、私の中で薄れ、忘れてしまっていたのです。

でもこの男の子は…。梨を贈ってくれたこの子たちは忘れていなかったのです。ずっと私た

ちのことを想ってくれていたのです。私が忘れてしまっている間も、ずっと止まることなく進む日常。月日が経つにつれ、少しずつ薄れていく震災の記憶。でも忘れてはいけないことがある。なくしてはいけないことがある。それは私たちはたくさんの人に支えられているということです。確かに3年前、私たちは多くのものを失いました。でもたくさんのもを受け取ることができたはず。全国から届けられた多くの物資。けれどもそれは「物」だけではなかったはず。 「頑張れ」「負けるな」そんな気持ちが痛いほど伝わってきませんでしたか？その想いに私たちはどれほど背中を押され勇気づけられたことでしょうか。そんな支えがあったからこそ、私たちはここまで頑張ることができたのだと思います。

そして、今もまだ私たちのことを想い、支えようとしている人たちがいるのです。私たちはその人たちの想いに応えることができているのでしょうか？

人と人はつながっている。想いはつながる。梨が私に教えてくれたように私も伝えたい。だから今、ここにいます。今度は私たちがみんなに勇気を与える番。だからこそ、私たちは目の前にある今できることを精一杯頑張らなければならないのではないのでしょうか。そういう姿を見せることが想いに応えるということなのではないのでしょうか。

私たちはみんなの想いに応えたい。「頑張っているよ」って、「負けないよ」って大きな声で伝えたい。それが私たちを支えてくれている人たちへの恩返しなのだと思うから。

がんばろう。復興に向けて。いつか「気仙沼はもう大丈夫だよ。」って、みんなに笑顔で言えるように。

<大袋に書いたメッセージ>



<新聞に取り上げられた梨下村塾「収穫」>

山 口 新 聞

大きく育てたよ 秋芳梨を収穫

美祿・別府小

美祿市秋芳町別府小 別府小学校(農舎秀雄校長、38人)の児童が14日、学校近くのナシ園で、自分たちが育てた特産「秋芳梨」の収穫を体験した。

地元の特産品を知ることで郷土への愛着や誇りを持ってもらうこと、同校が毎年取り組むナシ栽培の体験活動「梨下村塾」児童たちには4月以降、秋芳梨生産販売協同組合の永嶺克博組合長の指導を受けながら、花粉付けや余分な実を落とす摘果、袋掛けなどを体験しながらナシを育ててきた。

17日に販売体験 気仙沼中に売上金寄付

永嶺組合長は「収穫するときに実を引く張ると枝が傷付く。実は上に向けてと枝から離れる」と説明。児童たちは「フイト」声に収穫した。

収穫したナシは家に持ち帰ったり、地域の人たちに配ったりする。17日には同市秋芳町別府にある秋芳梨の選果場で販売体験する。売上金は、秋芳梨とともに東日本大震災の発生後から交流を続ける宮城県気仙沼中学校に贈る。

4年の林結衣さん(10)は「大きなナシが収穫できてうれし。気仙沼中学校の皆さんには秋芳梨を食べて元気になってもらいたい」と話した。

地元の特産「秋芳梨」を収穫する別府小学校の児童。14日、美祿市

(2)「花尾山登山」を通して

本校では、秋の鍛練遠足を兼ねて、3年に一度(別府小学校に在学中に2回は登るという意味で…)地域にある「長門富士」とも呼ばれる花尾山に登っている。裾野の秀麗な姿は、山口百名山の一山として広く知れわたり、県内外からも愛好家が登山に訪れている地域の誇りの山である。本校の校歌の一番は、「桜の丘のぼくたちは、花尾の山の子どもです」で始まり、「真澄の空の山なみに希望の雲を仰ぎ見る・・・」と、花尾山の山頂から四方を見渡した素晴らしい眺望が歌われている。



高さは600m余りであり、歩く距離もそう長くはない。しかし、長くて急な斜面を登るため、ロープ等の設置や登山道の整備が欠かせない。また、トイレの設置も2箇所ほど必要である。さらに1年生から全校児童が登る。そのため、保護者や地域の方の協力を得ながら実施している。

今年度がその花尾山登山の年であった。下記のような計画で行った。

- | | | |
|-------|---------------------------------|-------------------------|
| ① 期 日 | 10月 3日 (土) | 8:15 ~ 14:40 |
| ② 目的地 | 花尾山 (標高669.1m) | |
| ③ 参加者 | 児童・保護者・「花尾山の自然を守る会」の会員・地域の方・教職員 | |
| ④ 日 程 | 7:30 | 先発隊：別府小学校出発 (トイレのシート張り) |
| | 7:45 | 児童・保護者：学校集合 |
| | 8:00 | 学校出発 |
| | 8:15 | 出発式 |
| | 9:00 | 「花尾山」登山口到着 |
| | 11:30 | 「花尾山」山頂到着・・・弁当、記念写真 |
| | 12:30 | 「花尾山」山頂出発 |
| | 14:40 | 解散式 (「花尾山」登山口) |

この日のために、1学期から保護者や地域の方や職員で、話し合いをしたり、登山道の整備を行ったり、実際に登山を行ったりしていった。

今回はこの花尾山登山で、気仙沼中学校との交流にも取組んだ。まず、今までの花尾山登山の目的に、「被災地に届けよう！わたしたちの心を！！」という意味で、以下のことを加えた。

- ・みんなで力を合わせて山頂まで登り、別府っ子の元気とパワーを東日本大震災の被災地に届ける。

そこで、山頂では、ふるさと別府に向け大きな声で校歌をうたい、気仙沼に向けて、さらに大きな声でエールを送った。こうして、花尾山



の山頂から気仙沼へ別府の元気とパワーを送った。そして「がんばれ気仙沼」というカードを持って、写真を撮った。この写真は、もちろん気仙沼中学校へ手紙と共に送った。さらに登山参加者に配布した。

当日、子どもたちにとってはかなりの難行苦行であった。しかし保護者や地域の方が声をかけ、励ましてくださったおかげで参加者全員が山頂にたどり着き、無事に下山することができた。

花尾山の山頂から、気仙沼に別府の声は届かなかったであろうが、思いは十分届いたはずである。



5 成果と課題

平成23年の東日本大震災直後から、別府小学校では被災地支援の取組を行ってきた。PTAとしても、何らかの形でその取組に協力できないかと考えていた。本年度、PTA活動支援助成事業の指定校にさせていただいたお陰で、その思いを少しずつではあるが形にしていることができる。

こうした交流活動を通して、被災地を支援しているつもりであるが、こちらが学ぶことが多いのには驚かされている。家が流されたり、身内がお亡くなりになられても一生懸命前向きに生きている姿から、別府では持つことのできない考えや価値観に触れることができた。また、大きな被害にあったふるさと気仙沼を、元のように復興しようとする姿は、学校の教育目標「ふるさとを愛し、心豊かにたくましく生きる別府っ子の育成」につながっている。さらに、気仙沼中学校から送ってくるお礼の手紙やメッセージには、相手を思う気持ちは伝わり、元気にすることができるということも学べた。

今年度、PTA独自の取組としては、夏祭りでバザーを出したり、リサイクル品回収を行いその収益金の一部を義援金として送ったりした。こうした交流は、継続することが大切である。保護者だけではなく、地域にもこの活動の意義をもっと知ってもらい、支援の輪を広げていくことが継続していくことにつながっていくと考える。そのためには、今後もPTA

しては学校と協力して、地域にも広げながら、被災地へ温かい心を送り続けていきたい。